

## 茶道・能にみる美意識 A Study of the "The Way of Tea" and "Noh"

安田 保  
YASUDA Tamotsu

Two unique Japanese cultural treasures, "The Way of Tea" and "Noh" were established during the 14<sup>th</sup> to 16<sup>th</sup> centuries. Their aesthetic senses have affected our spiritual culture. There are similarities between the teachings of tea masters such as Murata Juko and Sen-no Rikyu and teachings of Noh players such as Kan'ami and Zeami. Their performing skills are elaborated well and gave a deep impression to audiences and guests. We also have to feel the heart of "The Way of Tea" and "Noh" behind the performance. The spirit and aesthetic sense of these arts teach us ways to create a peaceful world.

### 1. はじめに

中世に起こった芸道「茶道」と「能」は日本人の美的感覚に大きな影響を与え、その精神性、教えは自然に生活習慣に取り入れられている。日本人の美意識のすべてが茶道から始まったわけではないが、千利休(1522-1591)<sup>1</sup>が「わび茶」を大成させて以降、日本独自の美的感覚が強く意識されるようになった。茶の湯の心理が「わび」で表されるのに対し、能は「幽玄」をその本旨とする。

茶道は他の芸術に影響を与え、また逆に茶道も他の芸術から多くの影響を受けている。特に観阿弥(1333-1384)<sup>2</sup>、世阿弥(1363?-1443)<sup>3</sup>父子により大成された能とは美意識、精神を共有するところが多く見られる。

## 2. 起源

世阿弥が観阿弥の遺訓に基づき著した『風姿花伝』<sup>4</sup>の序言「夫、申楽延年の事態、其源を尋るに、或は仏在所より起り、或は神代より伝るといへども、(中略)其後、かの河勝の遠孫、この芸を相續ぎて、春日・日吉の神職たり。仍、和州・江州の輩両者の神事に従ふ事、今に盛んなり。」<sup>5</sup>、又第四神儀伝に「仏在所には、須達長者、祇園精舎を建て、供養の時、釈迦如来、御説法ありしに、(中略)それより、天竺に此道は始まるなり。」<sup>6</sup>とあるように、申楽の起源は仏在所=古代インドに始まる仏教にあるとされている。また、「上宮太子、天下少し障りありし時、神代・仏在所の吉例に任せて、六十六番の物まねを彼河勝に仰せて、同じく六十六番の面を御作にて、則 河勝に与へ給ふ。橘の内裏紫震殿にてこれを勤ず。天(下)治まり、国静かなり。上宮太子、末代のため、神楽なりしを、「神」といふ文字の片を除けて、旁を残し給(ふ)。是、日曆の「申」なるがゆへに、「申楽」と名づく。すなはち、楽しみを申によりてなり。又は神楽を分くれればなり。」<sup>7</sup>とあることから、申楽の始まりに仏教が関連していたことが分かる。上宮太子=聖徳太子は仏教に帰依した人であり、秦氏は中国の先進技術、文化を日本に持ち込んだ渡来人であった。<sup>8</sup>

茶道の起源は禅僧がもたらした喫茶の習慣であり、禅宗の初祖である菩提達磨は、インドで生まれ中国に渡り嵩山の少林寺で修行を重ねたと言われる。<sup>9</sup> 二つの芸道を遡るとその源がインドにあるのは興味深い。能は寺社の祭礼と結びつき、茶道は禅の修業に取り入れられ、共に宗教を媒体として大衆に広まって行ったのである。『風姿花伝』序言にある、「好色・博奕・大酒。三重戒、是、古人掟也。」の戒めは、禅宗の戒律を思わせる。

## 3. 精神

わび茶の祖と呼ばれる村田珠光(1423-1502)<sup>10</sup>の茶論は、弟子古市播磨(1459-1508)<sup>11</sup>に当てた書状『古市播磨宛一紙』、いわゆる『心の文』に著されている。

「此道、第一わろき事八、心のかまんかしゃう(我慢我執)也。こう(巧)者はそのねミ、初心の者を八見くたす事、一段無勿躰事共也。こうしゃ(巧者)に八ちかつき(近付)て一言もなけ(嘆)き、又、初心の物をはいかにもそた

(育)つへき事也。此道の一大事八、和漢のさかい(境)をまきらかす事、肝要々々、ようしん(用心)ありへき事也。

又、当時、ひゑか(冷枯)ると申て、初心の人躰がひせん(備前)物、しからき(信楽)物などをもちて、人もゆるさぬたけ(闌)くらむ事、言語道断也。か(枯)ると云事八、よき道具をも其あちわひ(味)をよくしりて、心の下地によりてたけくらミて、後までひへやせてこそ面白くあるへき也。又さ八あれ共、一向かな(叶)八ぬ人躰八、道具に八かか(抱)らふへからず候也。いか様のととり(手取)風情にても、なけく所、肝要にて候。

たたかまんかしょうかわるき事にて候。又八、かまんなくてもならぬ道也。銘道二いわく、

心の師と八なれ、心を師とせされ、とも古人もいはれし也。」<sup>12</sup>

この中で珠光は、第一に茶の湯の修行には自己過信の慢心、執心が妨げであると戒め、初心者育てる事を教えている。次に和漢のさかいをなくし、漢(唐物)と和(国焼き)の取り合わせを述べている。第三には、初心者が巧者の真似をして備前、信楽焼きを用いることの愚かさを戒めている。

同じ教えが『風姿花伝』第三問答条々に著されている。

「されば、上手だにも、上慢あらば能は下がるべし。いはんやかなはぬ上慢をや。能々考案して思へ。“上手は下手の手本、下手は上手の手本なり”と工夫すべし。下手のよき所を取りて、上手の物数に入るゝ事、無上至極の理也。

人の悪き所を見るだにも、我手本也。いはんやよき所をや。

“稽古は強かれ、情識はなかれ”とは、これなるべし。」<sup>13</sup>

上手でさえも慢心があれば、その芸は下がる。まして下手の思い上がりなどもっての外。下手が上手を手本とするのは、当たり前だが、上手も下手を手本とせよ。下手の長所を取り入れることこそ無上の極みである。また人の悪いところを見るのも勉強になる。長所は言うまでもない。稽古はしっかりとし、慢心することなかれ。との教えであるが、わび茶の祖珠光が、能の大成者世阿弥とが同じ教えを説いているのは偶然とは思えない。また『至

花道』の「鬨位事」で「上手の鬨たる手の、非却て是になる手は、これ、上手にはしたがふ曲なり。下手にはしたがはぬ手なり。さる程に、下手の我意にしたがふ分力にて、したがはぬ上力を求むるは、必ず失あるべし。」と実力も無い下手が上手を真似て無理な事をして失敗するという戒は、珠光の云う初心者が備前、信楽焼を持ち出すことは言語道断という教えと同じである。

#### 4. 美意識

『風姿花伝』花伝第七別紙口伝は、花の魅力について記されている。

「コノ口伝ニ花ヲ知ルコト。マツ、仮令、花ノ咲クヲ見テ、ヨロツニ花トタトエ始メシ理ヲワキマウベシ。ソモソモ、花トイフニ、万木千草ニ於イテ、四季折節ニ咲ク物ナレバ、ソノ時ヲ得テメヅラシキユエニ、モテアソブナリ。申樂モ、人ノ心ニメヅラシキト知ル所、スナハチ面白キ心ナリ。花ト、面白キト、メヅラシキト、コレ三ツハ同ジ心ナリ。イツレノ花カ散ラデ残ルベキ。散ルユエニヨリテ、咲ク頃アレバメヅラシキナリ。能モ、住スル所ナキヲ、マツ花ト知ルベシ。住セズシテ、余の（風体）に移レバ、メヅラシキナリ。」<sup>14</sup>

花を知ること。何故花の咲くのを見て、何故すべて花に例えたか考えなさい。花は四季折々の時季に咲くので珍しく興味を引くのである。申樂も人に珍しいと思わせるのが面白いのである。「花」、「面白い」、「珍しい」は同じ心である。すべての花は散る。散るゆえに、咲くのが珍しいのである。能も停滞する事がないのを花と知るべきである。停滞することなく、いろいろと演じるのが珍しいのである。<sup>15</sup>

利休の「朝顔の茶事」の逸話に見られる美意識は、世阿弥の云う「珍しき花」であり、「幽玄至極ノ上手ト人ノ思イ慣レタル所ニ、思イノ外ニ鬼ヲスレバ、メヅラシク見ユル所、コレ花ナリ」の「巖に花の咲かんがごとし」の境地をわびの茶人は目指したのである。『金春禅鳳雑談』<sup>16</sup>にある珠光の言葉「月も雲間のなきはいやにて候。」は、能の魅力であるシンボリックな演出であり、茶の湯が求めた不完全の美であった。利休が云う「小座敷の道具は、よろづ事たらぬがよし。」<sup>17</sup>も同じ心持である。物足らぬ不自由さを足れりとして楽しむのである。

## 5. 茶事と能の演出

茶事は亭主がまず正客を定め、相客を考え合わせ案内を出す事から始まる。二元的な一座建立で、亭主と客が一つになっての催しであり、その関係は能のシテとワキに例えられる。<sup>18</sup> 世阿弥が完成させた複式夢幻能<sup>19</sup> が二場面構成されているのと同様に、茶事も中入りを挟み、初座と後座に分けられる。

ワキである旅僧が旧跡を訪ねると里人に呼び止められ、その土地の物語を聞く。里人は自分がその物語の主人公であることを告げ消える。僧が不思議に思っていると、やがてシテが本来の姿で現れ、往時を偲んで舞を舞う。旅僧は夢うつつの内にやがて舞は終わり、旧跡は元の佇まいを取り戻す。これは、夢幻能の基本的な形であるが、茶事の演出もこれに似ている。初座の炭点前、懐石、菓子も前シテの昔語りであり、濃茶への導入部分である。中入り後の後座は、厳粛な雰囲気になる。亭主の濃茶点前はシテの舞であり、茶事の演出は濃茶をいただく時にクライマックスを迎える。やがて後炭、薄茶をいただくころには徐々に気持ちはうつつに戻り、茶事は終わる。客が去った後、亭主は一人炉前に座り、その日の事を思い出し余韻に浸る。

亭主はシテ、客はワキであり、観客である。亭主は座（茶室）の雰囲気を感ず、心から客をもてなす。客は亭主の心を十分に汲み取り、それに応える。双方の心が通っていなければ完成することのできない空間がそこには存在する。『山上宗二記』<sup>20</sup> には「客人がりのこと一座の建立にあり」と記されている。今日の茶事は一期一会であり、共有する時間、空間は二度とは再現されないのである。世阿弥の言葉にある「衆人愛敬を以て一座建立の寿福となす」<sup>21</sup> と同じ心持ちである。

## 6. 最後に

共に中世に確立された芸道とは言え、これだけの共通性が見られるには、いくつかの要因が考えられる。足利将軍家、信長、秀吉と時の権力者の庇護を受けた事により発達したのも要因であり、宗教を媒体として普及したことも要因として挙げられる。また、その美意識に和歌の影響を強く受けたことも要因の一つに挙げられる。世阿弥は「先、此道に至らんと思はん者は、非道を行はずべからず。但、歌道は風月延年のかざりなれば、尤これを用ふべし。」と能以外の芸道は禁じているが、歌道は進んで学ぶように説いている。茶道で

も、その教えを古歌に例え言い伝えている。古人が自然の美しさ、風流、恋情を三十一文字で表した美意識は、観阿弥、世阿弥、わびの茶人達を感動させたのであろう。

茶道、能は共に美を追求し、その精神性を高めることを目的とした為に、多くの共通性が見られるようになったと言える。能が「諸人快樂、国穩やかに、民静かに、寿命長遠」<sup>22</sup>を祈るように、茶道は「和敬清寂」の境地、平和を祈り、人、自然を敬い、心を清々しくし、しずけさを抱く。

美の追求は心の中を美しい物で満たす為であり、満たされた心には平和がおとずれる。茶道、能に限らず全ての芸術は心に平和をもたらすことを目的としている。

世界中であらゆる芸術が愛されているのは、人々が美しい物で心を満たされたいと願っているからである。我々は言葉の壁を超えて芸術に感動する時がある。それは、芸術が真の平和をもたらす可能性をもっているということである。

- 
- 1 林屋辰三郎代表編『角川茶道大事典』(普及版)角川書店、pp.761-762
  - 2 西野春雄・羽田昶『能・狂言事典 - 新訂増補 - 』平凡社、p.369
  - 3 同p.387
  - 4 同p.285
  - 5 表章・加藤周一校注『世阿弥 禅竹 - 芸の思想・道の思想 1 - 新装版』岩波書店、p.14
  - 6 同p.38
  - 7 同p.39
  - 8 同p.39
  - 9 林屋辰三郎代表編『角川茶道大事典』(普及版)角川書店、p.852
  - 10 林屋辰三郎代表編『角川茶道大事典』(普及版)角川書店、p.636
  - 11 林屋辰三郎代表編『角川茶道大事典』(普及版)角川書店、pp.1201,1202
  - 12 林屋辰三郎・横井清・榎林忠男編注『日本の茶書 1』平凡社、p.35
  - 13 表章・加藤周一校注『世阿弥 禅竹 - 芸の思想・道の思想 1 - 新装版』岩波書店、p.33
  - 14 同p.55
  - 15 同p.55 注
  - 16 永島福太郎『茶の古典』淡交社、pp.71,72
  - 17 中村直勝著『茶道聖典 南方録』浪速社、pp.100,101
  - 18 林屋辰三郎代表編『角川茶道大事典』(普及版)角川書店、p.876
  - 19 津村禮次郎著『能がわかる 100 のキーワード』小学館、p.37
  - 20 林屋辰三郎代表編『角川茶道大事典』(普及版)角川書店、pp.91,92
  - 21 種田道一著『能と茶の湯』淡交社、p.4
  - 22 表章・加藤周一校注『世阿弥 禅竹 - 芸の思想・道の思想 1 - 新装版』岩波書店、p.40